

知足(足るを知り)共生(共に生きる)の倫理を

セミナー「いかに『良い会社』ブランドを築き会社自体を

売り込むか」(第1回) 要旨

「梅田大学院コンソーシアム」 追手門学院大学 西岡健夫教授

欠陥製品、薬害、不当表示、廃棄物不法投棄、利益供与、談合...

さまざまな不祥事が企業の努力を水の泡にします。倫理の問題はリスクマネジメントの問題でもあり、企業の組織、戦略作りと一体にして考えなければなりません。

不祥事を防ぐという消極的な姿勢ではなく、今はもっと根源的な事柄から考える必要があると思います。

地球的環境問題(温暖化など)

生命科学問題(DNA操作など)

の2点はとりわけ重要性が増しています。

温暖化は企業の製造、販売、開発といった普通の経済活動がCO₂などを発生させ、それを熱心にやればやるほど、深刻さを増してゆきます。毎年のように世界的規模で異常気象が発生しており真剣に取り組んでゆかなければなりません。

生命科学の問題は神に変わって人間が「造物主」になる危険をはらんでおり、人間社会が根底から変わってしまう。秀才や天才的スポーツマンをDNA操作などでつくれるようになると、努力することの無意味化、超長寿社会の人間生活がどうなるかなどの問題が発生します。植物の分野では遺伝子を組み換えた農産物の問題もあり、営利本位の活動が先行することの危険をはらんでいます。こうした根源的な問題には根源的な対応が必要になってきます。

個人的には地球の資源環境問題も含めて科学が解決してくれることを期待していますが、希望的観測だけではなく、悪い面も考えなければいけません。

社会的責任に対する肯定論と否定論

企業の社会的責任については否定論やそれに対する反論があります。

「企業の役割は財・サービスの供給にあるもので、それ以上でも以下でもな

い。「経済は経済法の下で戦われるビジネスゲームの世界だ」「社会的責任を過度に企業に押し付ければ企業が競争力を失う」、さらに「企業は株主のものであり利益追求が目的になっている」などといった論理です。古くはアダム・スミスが指摘したように、個人が利益だけを追求していくうちに「神の見えざる手」に導かれて社会全体の利益を達成できるようになる、という見方もありました。

しかし、これらのいずれにも十分、反論ができます。企業は社会的存在であり、ゲームといっても消費者を巻き込みますし、倫理的判断を放棄すれば自らの自由を狭める結果を招きます。

意思決定における判断基準

倫理的判断基準は大別すると 功利主義と 人権原理とに分かれます。功利主義では全体の利益、つまり、最大多数の最大幸福が考慮され、人権原理では人権と正義を尊重する行為が善であり、尊重することが人間の義務と見ます。功利主義が全体の立場を代表するのに対し、人権原理、つまり義務論は個人の立場を重視します。

功利主義については、人はなぜ、効用を求め、それを最大化するのか。「中庸で満足できないのか」と言う問題が明らかではありません。資源環境問題が大きくなるのしかかってくる現状ではこれは、非常に重要な問題であると思います。人権原理に関しては何が人権か、人はどんな人権を持つか、といった問題が明らかではありません。結局、これらは社会契約として決めざるを得ないのではないかと思います。

経営倫理と法規制

経営倫理に関する部分の法規制をどうするか。現実には法律で細部まで文書化するのとは不可能であり、倫理にゆだねるほうが弾力的に対応できる面があります。倫理は各人が自発的に守るものであり、国家権力で規制する性格のものではないともいえます。

経済活動についてはルールを強化し、たとえば環境税、リサイクルの義務付けなどで思い切った「強化」と途上国を含めた全世界的な参加の2つが不可欠です。地球環境は人類が共有、共用する入会地というべきものです。

私の問題意識からいうと、自由競争システムの下で先進国は大変豊かになっているが、売り込みや需要創造が行き過ぎて浪費を招く恐れがあります。地球の資源、環境問題を考えると大きな問題であると思います。また、自由競争シ

ステムの下では競争が過ぎて共倒れになったり、世の中がぎすぎすしたり、敗者の救済をどうするかという問題が出てきます。

これら2つの問題点は物質主義と競争主義に伴う問題点です。これに対して東洋倫理はどんなヒントを与えてくれるか。それは「足るを知ること」(知足)と「共に生きること」(共生)であり、知足は物質主義の、共生は競争主義の是正に対応しています。

「知足」というのは、満足することを知らないで、欲望のままに物質的豊かさを追い求めると、人間は帰って不幸になる。満足と言うことを知らねばならない、ということです。言い換えれば「中庸」を重んじることです。「共生」というのは利己的にならないで、相手も自分も生かす、ということです。日本の伝統に照らしていえば、「和」を大切にということでしょう。

功利主義、人権主義と知足共生は問題の次元が違うだけで、互いに補完的なものであり、仮に対立が生まれたとしても総合的にバランスをはかりながら、合意を形成できると思います。また、「知足共生」という考えは法律・規則で互いに補完しあって対応できます。

温暖化や DNA の問題など根源的なテーマを突きつけられている現在は、結局、人間の幸福とは何か、人間とは何か、という問題を考え続けていくことだと思います。

まとめ (株)大阪彩都総合研究所
橋本 剛